観察とは、犯罪をした人または非行歴のある少年が、社会の中で更生できるように、保護観察官及び保護司による指導と支援を行うものです。

私は今までに約50人の方と保護観察でお付き合いしてきました。約6割が20歳未満の少年少女で、保護観察の担当になったときは、何度経験しても緊張してドキドキしながら初回面接を始めます。

付き添いの保護者とも初めて出会うのですから、スムーズな会話はできないですが、まず学校や家庭の様子を聞くようにしています。一言も話さない少年少女もいますし、親とその場で喧嘩を始める子もいます。それでも「今日は来てくれて有難う」と次に繋がるようにいつも話しかけます。

こうして月2回の来訪（保護司宅またはサポートセンターでの面接）が始まります。2回目からは本人だけの来訪が殆ど（ほとん）ですが、来訪は彼らにとってはなかなかの苦痛、苦行（億劫（おっくう）なのでしょうか）のようです。

友達との約束や遊びが優先され、約束の時間になっても来ないこともよくありました。昭和の時代では固定電話しかなく、こちらから連絡するも不在。仕方が無いので翌日に本人宅へ往訪するも不在。置き手紙をポストに入れて連絡を待つこともありました。

保護司に就任してしばらくは、こんなことが続くと、苛立ちを覚えることもしばしばでした。今は「何故来ないのだろうか、何かあったのかな」と心配になってきます。久しぶりに来訪してくれたときには「何故約束を破ったのか」とか「社会のルールを知っているのか」とは言わず、「よく来てくれたね、心配していたよ」と話しかけられるようになってきました。

～ある少年との思い出～

こんなことがありました。少年院を仮退院した19歳の少年との2回目の面接時間の約束は、仕事帰りの午後7時。1時間30分待っても来訪がないので、自宅に連絡すると兄が電話に出て「今、風呂です！」との一言。少し心が乱れました。午後9時に本人はさっぱりした様子で来訪して、「遅くなってすみません、ペンキが体中についてしまったので、風呂に入ってから来ました」と一言。彼は退院後、地元の塗装関係の仕事で頑張っており、他人宅を訪問するときには身ぎれいにして訪問するようにと少年院で教育されていたのでしょう。そのようなことで風呂に入り、身だしなみを整えて来てくれたのでした。

先ほどは心が乱れてしまいましたが、真面目な可愛い笑顔をみていると、来てくれたことが嬉しくなってきます。「そうだったの、お疲れ様、次からは仕事帰りのままで良いよ」。3回目からは仕事帰りの送迎車から直接来てくれるようになりました。その時も「この椅子に座って良いですか？」と塗装が付いたズボンを気にしていました。暫（しばら）くしてその子は本退院になりました。